

# 震災とお金 (私の体験)

今号から装いもあらたに、公認会計士であり作家としても活躍されている山田真哉さんの連載エッセイが始まります。今回は、ご自身も被災された阪神・淡路大震災での体験をもとに、それぞれが有事に備えつつ生活を続けていくためにはどんな経済的な視点が必要なのか、またそのためのヒントは何か、等についてお話しさせていただきます。

この度の東日本大震災により、被害を受けられた方々に謹んでお見舞い申し上げます。

被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

さて、第1回のテーマは「震災とお金」である。大変な時にお金のお話なんて不謹慎な、とお思いの方もいらっしゃるかもしれない。しかし、復興に当たって必要なものの一つは、まされもなくお金である。これは今回の大震災に限った話ではない。日本中、いや世界中のどこにいても天災は発生する。そうした有事の際には人のお金とどう向き合えばいいのか、普段から考えておかなければならないと思う。

私の場合、16年前に「震災とお金」について、深く考える機会があった。というのも、1995年1月、阪神・淡路大震災において、当時高校三年

生だった私の自宅（実家）が全壊したからである。

もちろん、16年前の震災と、今回の震災とを同列に語ることはできないのだが、その時の経験をもとにお話をしたい。

震災直後は当然、お金のことは考えられない。自分の命を守ることや、家族の安否を確認することとで精一杯だからである。そして、避難所に行くにせよ、知人の家に避難するにせよ、お金が必要になる機会も少ない。お金がなくても配給はもらえるし、お金があったとしても配給がたくさんもらえるわけではないからだ。

私も神戸の自宅が全壊した後は、無事だった親戚の家を転々とし、各地の避難所を回って物資を確保したが、お金のことは一切考えていなかった。高校生だったから、ということもあるだろうが、家庭の経済状態について思いを巡らすことは皆無だった。

## 山田 真哉 やまだ・しんや

公認会計士。1976年神戸市生まれ。大阪大学卒業。高3の時、阪神大震災に遭い自宅が全壊。その後、大阪大学文学部日本史専攻に進む。予備校講師として予備校に入社後、会計・法律・経営などを猛勉強し公認会計士二次試験に合格。

中央青山監査法人（当時）／ブライズウォーターハウスコーパスに勤務。会計士補広報委員長を2年間務める。元・厚生労働省「雇用・能力開発機構のあり方検討会」委員、東京都「都立図書館評議会」委員。

04年、公認会計士三次試験に合格後、独立して公認会計士山田真哉事務所を開設。05年、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』を出版、7ヶ月でミリオンセラーを達成。現在、160万部突破。



震災から半月後、我々家族はバラバラに生活することになる。両親は、神戸市郊外の伯父の家に、妹は学校に通うため自宅近くの従兄弟の家に、私は大阪の予備校が無料で開放してくれた学生寮に住むことができたのだ。特に、私が住む学生寮は家賃だけでなく、三食も無料で提供してくれたので、ここでもお金のことは考える必要がなかった。

### 考えが及ばなかった借金

私がお金のことを考えるようになったのは、震災から2ヶ月後のことである。家族がバラバラで暮らし続けることも、そして親戚の家になつとお世話になり続けるのも問題だと思い始めた両親が、家探しをスタートさせたのだ。

もちろん、最初は無料である仮設住宅への入居を希望していた。しかし、仮設住宅にはいつ入れるのか予想もつかない。さらに幼児や高齢者がいる世帯の入居が優先だったため、我が家は1年ぐらい待たされるかもしれない。こうした点も踏まえ、両親は仮設住宅への入居を断念した。

また、全国の自治体による、公営住宅への無料入居の募集もあった。しかし、父親の仕事のことを考えると、神戸の通勤圏から離れるのは難しかった。

こうした理由から、両親は民間マンションを探す決断をした。

当時の私は、「震災に必要なお金は全壊した自宅

の再建費用ぐらいだ」と思っていた。そのため、当面の住まいとなるマンションを借りるための敷金や礼金、そして月々の家賃などの費用が発生するとは全く考えてもいなかった。今振り返ってみれば、こうした費用が必要なのは当たり前のことだが、この時は、ただただ非常に驚いたことを覚えている。その後、神戸から西に電車で30分離れた加古川という町でマンションが見つかり、ここに1年ほど住むことになる。ちょうど希望の物件が見つかったのだが、ここでの賃貸費用は総額150万円ほどかかっている。

無論、お金がかかったのは家賃だけではない。家財道具を買う揃える必要もあるし、慣れない土地で食品を安く調達するすべも知らない。そして、妹は神戸、私は遠く大阪にある大学まで通う交通費も発生する。これらを考えると、追加費用が総額で100万円はかかった。

さて、避難先の加古川に移って、我が家は、ようやく全壊した自宅の再建に取り掛かることができた。自宅は、土地も建物も父親の名義で、住宅ローンもちょうど返し終わったばかりだった。そのおかげで、二重ローンだけは避けることができた。(なお、当時は私の親戚を含め、多くの勤労世帯が二重ローンを抱えることになった)

とはいえ、我が家も到底自己資金だけでは足りなかった。先述した家財道具の買い替えなどの負担もあり、自己資金は底を尽きていたのである。

## 連載エッセイ 会計士のやさしいお金のお話 ㊦ 震災とお金 (私の体験)

第1回

我が家は昔から贅沢なことは一切せず、世間に比べかなり節約をしていたので、貯金はそれなりにあったはずだ。にもかかわらず、突然借金を背負うことになったのだ——これは当時の私にとつて、かなりショックな出来事だった。これが震災なのだ、と心底、恐ろしくなった。

結局、再建には総額で、約1,250万円がかかっている。

### 少し距離を置いて 平時と有事を考えてみる

あらためて整理すると、自宅全壊後の対応として、両親には3つの選択肢があった。

- 1 新たに民間のマンションを借りる。
- 2 避難所や親戚の家を転々として、仮設住宅や近くの公営住宅が当たるまで待つ。
- 3 土地を売った資金で、新たに家を買う、もしくは賃貸物件に住む。

いま思い返すと、「3」の土地を売るという選択肢もあったのかもしれない。しかし、それをしなかった、いや、できなかったのは、地元への愛着以上に、震災で被害の大きかった地域の土地はなかなか売れない、という事情もあったのだろう。

結局、両親が選択したのは、「1」のマンションを借りる、であった。

実はこの選択に対し、当時の私はちょっと怒って

いた。これまでずっと節約を強いる家庭だったのに、なぜここでお金を惜しみもなく使うのかと。なぜポリシーを変えるのかと。

……しかし、年齢を重ねた今ならばわかる。

平時時と非常時で、お金の使い方は変わるのだ。

両親は、非常時では節約を優先したお金の使い方だったのが、非常時には家族を守ることを優先した使い方に変えたのだ。

そもそもお金の使い方はずっと不変ではなく、また、ふらふらと変えるものでもない。平時時と非常時に分けて考える。そして、非常時には平時時の考え方をあっさり捨てることこそが大事なのだ。

あなたが、有事の際のシミュレーションをする時には、この平時時と非常時のお金との向き合いかたの違いを考えてほしい。

私もこの16年間、阪神・淡路大震災のことは片時も忘れたことはないが、震災時のお金のごとは、正直すっかり忘れていた。だから、こうして原稿を書きながら、我が家（および我が会社）の震災時のお金対策を慌てて立てているところである。

## 教訓は活かし続けること

最後に、私が自分の体験から学んだ4つの教訓について、記しておく。あくまでも震災の発生を前提にした個人的な考え方であることを、ご留意いただきたい。



### 1 近くの他人も大事だが、遠くの親戚も大事

近所付き合いがあったほうが、避難の際はなにかとやりやすい。しかし、それ以上に遠くの親戚とも仲良くしていたほうがいい。いざという時の避難先になるし、物資の調達もお願いできる（親戚が同じ地域に多い場合、全員が被災者になる可能性もある）。遠くの友人も同様に貴重な存在である。

### 2 家は簡単に無くなるが、土地は残る

どんなに免震構造を施しても地盤が悪い、隣の

ビルが倒れてきた、などの理由で、家は壊れる時はあっさり壊れるというのが、私の実感だ。一方、土地は地盤沈下などがない限り財産として残る。先行き、持ち家を考えておられる方は、土地を購入する際、地盤調査やハザードマップ（自然災害を予測した地図）をしっかりと確認しておきたい。

### 3 有事に住める当てを探しておく

分譲マンションが被災した場合、再建に向けた話し合いがもめて、元通り住めるようになるまで時間がかかるケースをいくつも見てきた。再建までに長期間かかっても大丈夫なように、実家や親戚の家など有事に一定期間住める当てを探しておいたほうがいい。

### 4 「備え」として義援金は当てにしない

阪神・淡路大震災でも多くの義援金が集まり、我が家が頂戴したのは約50万円である。義援金を出して下さった方々のお気持ちは本当にありがたく、辛い生活の中で心の支えになった。ただ、現実問題として、家を再建するまでにかかった総額で1250万円以上の支出に比べると、とてもそれをカバーできる金額ではなかった。大災害の場合は、義援金も多く集まるが被災者も多いので、一人が受け取る金額は、生活再建のために必要な費用に比べて小さくなるのも仕方がない。支給される金額がいくらになるかはケースバイケースで様々だろうが、これからの「備え」としては、義援金を最初から当てにはしないほうが健全な考え方である。